

この最後の非俗派書齋人！「森の生活」が似合う

田村紀雄

わたしが本学に「大学院コミュニケーション学研究科」の創設準備を命じられたのは1997年である。規制緩和である「大綱化」後の最初の「カタカナ学部」の大学院創設であるから気を遣うこと多々であったが、なかでも教員人事であった。

新研究科のカリキュラムと教員のラインアップの案を熟慮作成して主務官庁へ認可を求めて文書を提出するわけである。ひとつの学部新設が国会で総理大臣や文部科学大臣への質疑など大問題になるほどだ。許認可の成否は新規事業として大学の浮沈がかかる。

吟味した担当科目ひとつひとつに教員名を配置する。研究科開設の申請書類に全学の叡智を集中させての始動だ。全国から国の厳格な資格審査に適合する優れた教員を集めることになった。優れた教員を集めるということは、当時の文部省の教員資格審査委員会の審査をパスするというだけでなく、将来の研究者や高度な専門家をめざす学生を集め、サステイナブルな研究科にしてゆくうえで、不可欠な胎動であった。

授業科目のひとつ「文化とメディア」の担当科目で着々と業績をあげていた渡辺潤さんが眼にとまった。かれのホームページでの研究生活・仕事ぶりは若い学徒に人気であった。

わたしが渡辺潤さんにはじめて会ったのは1974年の京都においてである。今出川通りにあった「ほんやら洞」という喫茶店で若い仲間とときどき議論したことがある。京都には鶴見俊輔、多田道太郎、仲村祥一、井上俊ら文化研究でも一家をなした知人もおおく、のち「現代風俗研究会」の会合でもわたしは京都に行く機会が多々あった。

渡辺潤さんも、その周辺にいたとおもう。1982年、かれが単独執筆で世に問うた『ライフスタイルの社会学』で研究者としてのレールの方向をはっきりさせた。1960年代のカウンターカルチャーを皮切りに世界の若者を席卷していた生活様式の革新とメディアの関係を分析したものだ。

この書物の1年ほどまえの1981年には、数人の共著『生きるためのメディア図鑑』を上梓していた。ここでは若者文化にかかわる数多いミニコミが論評されている。そのとき、すでにサブカルチャーとしての「リトルマガジン」、「からだ」、「小集団」などをメディアとしてとらえなおしている。

小さなメディアにはこころがあった。わたしも渡米の際には作家桐島洋子の著書名にあるような『淋しいアメリカ人』たちが生んだ『LAフリープレス』『パークレイ パープ』等のいわゆるアングラ誌を買い集めてきた。このアングラ誌の担い手たちも、加齢し、家族を

この最後の非俗派書齋人!「森の生活」が似合う

もち生活を立て直すためにメディアのかたちをかえてゆく。

キャンパスからコミュニティにかえり、大都市から地方都市へ移動して、あたらしいかたちの雑誌「シティ・マガジン」(日本ではタウン誌)を創造する。これも時代の反映だ。でもかれらにはなんらかのこだわりがある。学問にもこだわりは不可欠だ。

渡辺潤さんは、その後も、『私のシンプルライフ』など数年にいちど話題作を世に問うている。すでにその時から、著作やホームページを通じてネットワーク「渡辺ゼミ」は日本の若者層に点在していたわけだ。

時に世界はカルチャー・スタディブーム、ミニコミの時代、この状況研究にぴったりの渡辺潤さんを研究科のスタッフに迎えることにした。すでに関西でこの方面の研究者もあつまっていた私立大学の大学院で教鞭をとり、研究業績をあげていたが、卒業学部は東京であり、実家が本学の多摩川や野川を見下ろすハケとの指呼の距離らしいことを思い出して招くことにした。

1999年、新研究科の教員として本学に着任した渡辺潤さんは25年前、京都で会ったときと同じ「ライフスタイル」、ノーネクタイに、髭面、ジャンパー、無雑作な髪の毛(白髪がすこしあったが)姿であった。話し方も相変わらず、ほそほそとしていた。驚いたのは住まいだ。両親の待つ実家とばかり考えていたが、なんと山梨県の丸太小屋とか。陶芸家でもある夫人の影響もあっただろう。実際、すぐ陶芸用の窯もつくられたという。

わたしは即座に「君はヘンリー・ソローの“森の生活”が似合うよ」とレットルをはって納得した。かれも、住むうちに「森の生活」の住民の自覚が強くなってきているとみうける。わたしは、河口湖のほとりの渡辺潤さんの丸太小屋も、ウォールデン湖畔のソローの手作り小屋もみたことはないが、おそらく似た「かたち」をもっているにちがいない。

カルチャーにはじつはかたちが大事なのだ。かたちをもたない文化はない。文化はかたちから創られてゆくともいえる。最初にかたちありである。その逆ということはない。ここでいう「かたち」というのは、環境や空間、装置(キャンパス)、道具(方法論)、工作者(教員)等の生産手段の全部だ。渡辺ゼミにあつまった学生、院生はこの新しいかたちに魅力をもとめ、またみずからも、新しいカルチャーの創造をめざしているかのようにみうける。

ことに院生、これはどのゼミでも共通していることだが、いちどキャンパスという枠組みをはみだして、生きる試みをした人間が多い。かれらに異なる異形のかたちが期待されている。大学はそのような学生、院生のたましいや思想のサンクチュアリーの間でもある。

河口湖のほとりの「森の小屋」は、あたらしい「野生の学舎」として渡辺ゼミの間となるだろう。ヘンリー・ソローが「森のひと」となっても、ロックの時代のかたちをまもり、F. H. オルボートのいう社会への「同調主義」に背を向けて形式逸脱の美学を楽しんだように渡辺潤さんは読書と思索を続けてゆくことだろう。あるいは、信条を守って欧州から米州へ

渡った学問のメノナイトか。俗っぽい「学会」も性分にあわない書齋人に、ことし（2017年）生誕200年をむかえたソローの名言から同学の先輩、同僚のひとりとしてつぎのことばを借りて贈りたい。

「人は夢に向かって大胆に歩み進め、心に描いた理想を目指して忠実に生きようとするなら、普通の暮らしでは望めない。簡素な生活へ！」（今泉吉晴訳『ウオールデン 森の生活』）